

聖霊降臨後第26主日 ルカ21章5―19節

〔直訳〕

- 5 そして ある者たちが 言っていると 神殿について
次のことを 美しい石で そして 奉納物で それが飾られている
彼は言った、
- 6 「これらのものに関して ところの あなたがたが見ている
来るだろう 日々が
それらにおいて 残されないだろう 石が
石の上に ところの 崩されないだろう」。
- 7 だが 彼らは尋ねた 彼に 言いながら、
「先生、いつ それでは これらが あるでしょうか
そして どんな しるしが
とき まさにある これらが 起こることが」
- 8 だが 彼は 言った、
「注意しなさい ことがないように あなたがたが惑わされる。
なぜなら 多くの者が 来るだろう 私の名前のもとに 言いながら、
「私 である」、そして、「時が 近づいた」。
行くな 彼らの後を。」
- 9 だが あなたがたが聞くととき 戦いを そして 騒乱を、
おびえるな。
- なぜなら あらねばならない これらが 起こることが 最初に、
しかし ない 直ちに 終わりは。」
- 10 その時 彼は話していた 彼らに、
「立ち上がるだろう 民は 民に対して そして 王国は 王国に対して、
- 11 また 大きな地震が
そして いろいろな場所で 飢饉が そして 疫病が あるだろう、
恐ろしいことが またそして 天から 大きなしるしが あるだろう。
- 12 だが すべてこれらの以前に
彼らは上に置くだろう あなたがたの上に 彼らの手を
そして 彼らは迫害するだろう、
- 13 渡して 会堂と牢の中へ、
連行される者らを 王たちと統治者たちの前へ 私の名前のために。
- 14 それは機会となるだろう あなたがたに 証しのための。
それで 置きなさい あなたがたの心の中に
弁明するために準備しないことを。
- 15 なぜなら 私は 与えるだろう あなたがたに 口と知恵を

ところの できないだろう 反対することが あるいは 反論することが
あなたがたに対立する者たち皆が。

16 だが あなたがたは渡されるだろう

そして 親たちと、兄弟たちと、親戚たちと、友人たちによって、

そして 彼らは死なすだろう あなたがたのうちの（ある者たちを）、

17 そして あなたがたはあるだろう 憎まれながら すべての人によって 私の名前のゆえに。

18 そして 髪の毛は あなたがたの頭の 決してなくならない。

19 あなたがたの忍耐の中で 獲得しなさい あなたがたの魂を。

〔新共同訳〕

5 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

7 そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしこそだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。9 戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。

10 こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」11 として、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあるがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引つ張って行く。13 それはあなたがたにとって証しをする機会となる。14 だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。15 どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。16 あなたがたは親兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。17 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。18 しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。19 忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

① 神殿崩壊の予告（5—6節）

② 神殿の見事さに驚嘆する「ある者たち」

並行箇所マルコ13章1節では、神殿の見事さに感嘆するのは「弟子の一人」であり、マタイ24章1節では、弟子たちは「イエスに神殿の建物を指さした」とだけ述べられている。ルカでは、驚嘆する「ある者たち」が「いつ、どんなしるしがあるでしょうか」と尋ねる（7節）が、マタイでは「弟子たち」（二四3）が尋ねている。マルコ13章3節では「ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ」という特定の弟子の名が挙げられている。また、マタイとマルコでは、イエスはオリブ山で語ったとされている。ルカでは、弟子ではなく、「ある者たち」に変えることによって、終末の教えが広く知られるべきものであることが示唆されている。

マルコ13章1―2節

イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」イエスは言われた。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

マタイ24章1―2節

イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。そこで、イエスは言われた。「これらすべての物を見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

⑥「神殿」

ソロモンが建立した「第一神殿」は紀元前五八七年にネブカドネツアルによって破壊された。捕囚後にゼルバベルのもとで「第二神殿」の建設が始まり、紀元前五一五年に完成を見る。ヘロデ大王は紀元前一九年、大幅な増築工事に着手し、紀元後九年に一応の完成を迎えて献堂されたが、最終的な竣工は紀元後六四年。しかし紀元後七〇年、ローマ軍はこの神殿を破壊した。

⑦「日々が来るだろう」

この句はルカが挿入したものであり、並行箇所のマタイやマルコでは、「一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と述べられている(マタイ二四2、マコ一三2)。6節は一続きの文章だが、その中心は「日々が来るだろう」であり、ルカの時代のキリスト者がイエスの名による迫害にさらされていたことを思い起こさせる。人々は神殿の壮麗さに目を惹かれていたが、イエスはその背後にある神の計画に目を向け、神殿が完全に崩壊する日が来ると予告する。

⑧終末のしるし(7―11節)

⑨この段落は7節の「しるし」と11節の「しるし」によって囲い込まれている。10―11節を並行箇所のマルコの13章8節と比較すると、次のような違いがある。

マルコ13章8節

民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。

ルカ21章11節

そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。

ルカはマルコの「地震」を「大きな地震」とし、「飢饉」を「飢饉や疫病」とし、さらにマルコの「これらは産みの苦しみの始まりである」を削除し、「恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」に変えている。マルコでは「始まり」にすぎない出来事だが、ルカでは「恐ろしいこと：天から大きなしるし：」(直訳)、つまり終末そのものの到来を示す出来事とされている。ルカはここで、25節で語られる終末の出来事を先取りしている。

⑩9節の「騒乱」と訳した語、アカタスタシアは「不安定・無秩序」を意味し、「内戦」を指す。

マルコの並行箇所では「戦いのうわさ」。66―70年の反ローマ戦争を示唆しているだろうが、同時に、終末の日の戦いをも暗示している。戦争や騒乱は最初に「起こらねばならない」。この表現は神の意思によって起こる出来事の必然性を表す。

◎11節「地震・飢饉と疫病・恐ろしいこと・天からの大きなしるし」。天変地異は、バビロン・エドム・エジプトに下される神の罰を象徴的に描く旧約箇所（イザ一三10、三四4など）に見られ、さらに黙示思想に受け継がれ、神の行動を示すしるしとして描写されている（黙六12、八5、一八8）。

④当時のユダヤの人々は、エルサレム神殿こそ神がとこしえに住まうところと考えていた。そのため、イエスの言葉に驚いて、その「しるし」を尋ねる。イエスの答えは「惑わされることがないように注意しなさい」という指示で始まるが、「惑わされない」ことはキリストを信じる者の特徴である。イエスを名乗る者が多く現れても、ついて行ってはならず、戦争や騒乱のうわさを聞いても、おびえる必要はない。それらはすべて「起こらねばならない」こと、すなわち、神の計画に従った出来事だからである。神の目的は人類の救いにあるのだから、神を信じる者は、どのような出来事にも惑わされるはずがない。

③迫害の中での証し（12―17節）

①ルカは11節で、マルコが終末の「始まり」に過ぎないとする出来事を終末そのものとして書き表した（25―28節参照）。ここにルカが福音書を著した意図が込められていると言える。それは12―17節で明らかにされている。

②この段落の冒頭句「だが、すべてこれらの以前に」はマルコにはなく、ルカが加えた句。マタイは「そのとき」と述べる。11節を終末そのものの描写に変えたルカは、この句を加えることによって、読者の注意を「終わりの日」から、終末以前の「今」へと引き戻す。そして、迫害の時である「今」、どうすべきかを教える。

③この段落は「渡す」と「私の名のために（ゆえに）」とによって囲い込まれており、「今」は、イエスを信じる者に必然的な迫害の「今」に他ならない。新共同訳で「引き渡す」（12節）、「裏切る」（16節）と訳されている語は原文では同じ動詞（パラダイドミ）。

④しかし、その迫害は、13―15節にあるように「証しのための機会」となり得る。迫害という過酷な状況、人間の目には絶望と映る現実こそが、イエスを証しするというもつとも大切な使命を實踐する場となる。イエスは、そのための最良の準備は「弁明するために準備しないことを心に置く」ことだと語る（14節）。なぜなら「私は与えるだろう」とあるように、その時、イエス自身が「口（言葉）と知恵を授ける」からである（15節）。イエスに信頼すれば、「対立する者たち」の誰もが「反対したり、反論することができない」言葉と知恵が与えられ、イエスを証しする者とされるのである。

④いのちへ至る忍耐（18―19節）

①「あなたがたの頭の髪は決してなくならない」キリストを信じる者に神から与えられる保護の確かさが表現されている。神殿はやがて崩されるが、神の保護は決して崩されることがない。だからこそ、神に信頼する者はどのような困難に会っても、それに耐えることができる。

① 19節では「あなたがたの忍耐の中で」が文頭に置かれて、神の保護に支えられている忍耐が強調されている。キリストを信じる者の「忍耐」は自分の力からではなく、神に信頼して救いを待ち望むことからわき上がってくる。

③ マラキ3章19―20 a節

19 見よ、その日が来る

炉のように燃える日が。

高慢な者、悪を行う者は

すべてわらのようになる。

到来するその日は、と万軍の主は言われる。

彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。

20 a しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには

義の太陽が昇る。

その翼にはいやす力がある。

② a マラキ書が書かれたのは紀元前五世紀初頭とされる。マラキ1章8節には「総督」という言葉が現れるので、他国の支配下にあるはずである。しかも神殿での祭儀が前提とされているから、紀元前五一年の神殿再建の後に書かれているのは明らかである。一方で、マラキは祭儀がおざなりにされていることを嘆き、批判しているから、紀元前四五八年のエズラによる宗教改革よりも前だと思われる。とするなら、紀元前五世紀の初めを考えるのが妥当になる。神殿は再建されたが、約束されていた栄光は見えない。そのため人々の間では、信仰への熱意が冷め、自己中心的な生き方が広がった。マラキはその中で神への信仰を取り戻させようとした預言者。

③ b 「見よ、その日が来る」

強調語「見よ」によって、未来に起こる事柄を荘厳に宣言する。「その日」とは神が介入することであるが、いつ起こるのか、その日を特定することがない。神に絶大の信頼を置く者にとっては、それはいつであつてもかまわない。その日を信じるがゆえに、今の現実集中する。

④ c 「その日」は「炉のように燃える日」、神の怒りが火のように燃えさかる日である。「高慢な者」とは、動詞ジード〈煮え立つ・傲慢に振舞う〉から派生した言葉で、「神を自分の前に置くことなく、神の戒めからそれた者」を表す。彼らを神は「燃え上がらせ」る。この語は動詞ラーハトで「木々だけでなく、山々や地の基を燃え上がらせる」の意味。そこで、「根も枝も残さない」ことになる。

⑤ d 「義の太陽」。ここでの「義」は「救い・勝利」の意味であるから、この句は救いの神の象徴。オリエントで礼拝されていた太陽神は光線を翼のように広げた円盤として表され、その翼の先には手があり、そこから礼拝者を生かす力が発散されると考えられていた。マラキはこのイメージを借用している。ここでの「翼」は太陽神が発する光線のこと。高慢で悪事を行う者たちに対して忍耐していた人々が、晴れた日に牛舎から解放された子牛のように、解放を喜ぶ。

⑥ e 紀元前五世紀の初めという時代は、神への熱意が冷め、祭儀も形骸化していた(16以下)。しかし、人々は神を忘れたわけでも、祭儀を否定したのでもない。ただ信仰に力が入らず、それを最優先の課題として生きることができなくなっていた。このような風潮をもたらした原因の一つ

は、栄光がさっぱり見えない現状への落胆だと思われる。預言者ハガイやゼカリアの説教に心を動かされ、神殿再建に立ち上がり、前五一五年に神殿を完成させたが、預言者が約束した栄光が到来したとはとても言えない。人々は待ちくたびれ、熱気はなえ、自分の願望を中心に生きた方が得ではないかという思いが大きな誘惑になっていた。

①このような誘惑は、一足先に自己中心に生き始めた人の幸いを目にするとき、いっそう強く押し寄せてくる。

あなたたちは言っている。

「神に仕えることはむなししい。

たとえ、その戒めを守っても

万軍の主の御前を喪に服している人のように歩いて

何の益があるうか。

むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。

彼らは悪事を行っても栄え、

神を試みても罰を免れているからだ。」(三14―15)

「神に仕えることはむなししい」という思いが人々を侵食し始めている。神はそれに応えて、「高慢な者」がわらのように燃える日が来ると告知する。聖書では神との関係が重要であり、「高慢な者」とは「神ではなく、自分の願望を中心に生きる人」のことである。そのような人は神の目に「悪を行う者」である。

②従って、「高慢な者」の正反対の人が「わが名を畏れ敬う」(20節)人とされている。「高慢な者」がわらのように燃やされる日が来るが、その同じ日に「神を畏れ敬う人」には「義の太陽」が昇る。ここでの「義」は「救い」を表すから、この太陽には「いやす力」がある。神は翼のように広がる光線となって、神を待ち望む者を救いに招く。

④終末を説くのは、今を生きるため

③マラキは終わりの日に「高慢な者、悪を行う者」の滅びがあると説くが、終末には破滅や裁きという暗い未来が連想されがちである。しかし、マラキが「わが名を畏れ敬う人」の救いを語るように、聖書の語る終末は決して滅びではなく、むしろ、選ばれた者たちの救いの時である。マラキは確かに将来の「その日」について語るが、その目的は現在をどのように生きるべきかを説くためである。「その日」の到来に目を向けるとき、「神に仕えることはむなししい」という思いに囚われる心、なえやすい信仰心を奮い起こし、神に従う生き方に留まることが出来る。

④偽預言者が現れても、戦いや騒乱が起こっても、「直ちに終わりはない」(9節)。これらは「最初に起こるべきこと」、すなわち、神が起こすと決めたことである。キリストに従う者は偽預言者に「惑わされる」ことはなく、戦いや騒乱に「おびえる」こともない。すべては神の救いの計画であると信じるからである。

⑤神の計画は救いにあり、その神はキリストを信じる者を守る。それをわきまえる者は終末への恐れから解放され、「今」を、神を信頼して生きる時とすることが出来る。聖書が終末を語るのをおびえさせるためではなく、「今」に集中して生きることが出来るようにするためである。キリストを信じる者の「忍耐」は、さらに優れた「いのち」を獲得するための忍耐である。